

## 身と心

——白居易「自戲三絶句」から見えるもの——

中原 健 二

佛敎大學

はじめに

生命の有限性、これにどう對處するか、は、中國でも古代から人の心を捉えて放さなかつた。人は古代からその解決策を様々な模索してきたわけで、不老不死の仙薬は直接的解決策と考えられたし、内面的には老莊や佛敎などの思想・宗教が精神的解決策を提示してきた。文學作品においてもこの問題が素通りされるはずもなく、たとえば、「古詩十九首」、曹操「短歌行」、陶淵明「形影神」などがやはりそれぞれに詠じてきた。<sup>①</sup>

生命の有限性は誰も逃れられない。そのことを認めた上

身と心(中原)

で、では士大夫としていかに生きるべきか。在俗(官)と脱俗(隱・歸農)の間を搖れ動きながらも、みずからの責務を自覺するがゆえに、いわば「あきらめる覺悟」を持つて在俗を選び取ったのが、中唐以後の士大夫ではなかつたか。

白居易が開成五(八四〇)年、六十九歳、太子少傅として洛陽に分司していたときの作である「自戲三絶句」は、その邊りのことを考えさせてくれる。小稿では、白居易の精神のあり方を「身」と「心」を用いた表現から考えて見たい。

以下、白居易詩の引用は中華書局本『白居易集』に、その他の唐詩は『全唐詩』に據る。また、白居易詩の制作年は朱金城『白居易集箋校』に據った。

### 一 「自戲三絶句」と「形影神」

「自戲三絶句」は、「心問身」「身報心」「心重答身」の三首から成る。これが「形贈影」「影答形」「神釋」から成る、陶淵明の「形影神」三首を意識して作られているのは

容易に見て取れよう。事實、「效陶潛體詩十六首（陶潛の體に效う詩十六首）」をはじめとして、白居易が陶淵明の影響を受けているのは周知のことである。

そこで、「自戲三絶句」の内容に入る前に、「形影神」三首を簡単に確認しておこう。

陶淵明の「形影神」三首では、序に、

貴賤賢愚、莫不營營以惜生、斯甚惑焉、故極陳形影之苦、言神辨自然以釋之、好事君子、共取其心焉

（貴きも賤しきも賢きも愚かなるも、營營として以て生を惜しまざる莫し。斯れ甚だ惑えり。故に極めて形と影との苦しみを陳べ、神の自然を辯じて以てこれを釋けるを言う。好事の君子、共に其の心を取れ）

とあるように、「形」と「影」の苦しみを「神」が止揚するという體裁を取る。

### 形贈影

天地長不沒、山川無改時。草木得常理、霜露榮悴之。謂人最靈智、獨復不如茲。適見在世中、奄去靡歸期。奚覺無一人、親識豈相思。但餘平生物、舉目情悽涼。

我無騰化術、必爾不復疑。願君取吾言、得酒莫苟辭。形は、人の生命の有限性を嘆じ、現世の樂しみを重視して「得酒莫苟辭」と勸める。生命の有限性に對する悲哀を忘れるには、最も一般的な方法であろう。これに影が答える。

### 影答形

存生不可言、衛生每苦拙。誠願遊崑華、邈然茲道絕。與子相遇來、未嘗異悲悅。憩蔭若暫乖、止日終不別。此同既難常、黯爾俱時滅。身沒名亦盡、念之五情熱。立善有遺愛、胡爲不自竭。酒云能消憂、方此詎不劣。影は、生命の有限性を一旦認めるが（「身沒名亦盡、念之五情熱」、酒では結局悲哀は斷てぬとして、善行を積めば人々はいつまでも覺えていてくれる（「立善有遺愛」）、つまり死後に名を残せば人は生命の有限性を乗り越えられると）言う。

### 神釋

大鈞無私力、萬理自森著。人爲三才中、豈不以我故。與君雖異物、生而相依附。結托既喜同、安得不相語。

三皇大聖人、今復在何處。彭祖愛永年、欲留不得住。  
老少同一死、賢愚無復數。日醉或能忘、將非促齡具。

立善常所欣、誰當爲汝譽。甚念傷吾生、正宜委運去。

縱浪大化中、不喜亦不懼。應盡便須盡、無復獨多慮。

神は、兩者の對處法の無益なことを指摘して、形に對しては「日醉或能忘、將非促齡具」と言い、影には「立善常所欣、誰當爲汝譽」と言う。そうするのではなく、「縱浪大化中、不喜亦不懼、應盡便須盡、無復獨多慮」が最善の方法なのだと言うのであるが、果たして、それが可能か。神にこのように言わせて、陶淵明にいささかの動搖もなかつたであらうか。

「自戲三絶句」にも短い序があり、

閑臥獨吟、無人酬和、聊假身心相戲、往復偶成三章

(閑臥して獨吟すれば、人の酬和する無し。聊か身心を假りて相戲れ、往復して偶たま三章を成す)

という。詩題に「自戲」と言い、序に「相戲」と言うが、その詠う内容を文字通りに「一時の戯れ」とは見做せない。白居易は輕みを帯びた口調ではあるが、閑職とはいへ官僚

身と心(中原)

である我が身を省みて、その思いを詩に托したと見える。まずは「心問身」、心が身に問う。

心問身云何泰然 心 身に問うて云えらく 何ぞ泰然

たる

嚴冬暖被日高眠 嚴冬に暖被して 日高くして眠る

放君快活知恩否 君を放ちて快活ならしむるに 恩を

知るや否や

不早朝來十一年 早朝せざるより來このかた 十一年

白居易は大和三(八二九)年、五十八歳の時、刑部侍郎を退き、太子賓客をもつて洛陽に分司した。以後、二年餘りの河南尹在任をはさんで、太子賓客・太子少傅分司として洛陽にあつた。末句はそのことを言う。心は身に向かつて、「君が樂をしてきたのは私が洛陽に退くことを決心したお蔭だ」と言うのである。これに對して「身報心」、身が答える。

心是身王身是宮 心は是れ身の王 身は是れ宮

君今居在我宮中 君は今 居りて我が宮の中に在り

是君家舍君須愛 是れ君の家舍なれば 君は須らく愛

すべし

何事論恩自説功 何事ぞ 恩を論じて 自ら功を説く  
君が安穩にしているのは、私が君を置いてやっているか  
らこそ。恩着せがましいことを言わないでもらいたい。す  
ると、「心重答身」、心がまた言う。

因我疏慵休罷早 我的疏慵にして休罷むること早きに  
因って

遣君安樂歲時多 君をして安樂ならしめて 歳時多し

世間老苦人何限 世間 老苦の人 何ぞ限らん

不放君閑奈我何 君を放ちて閑ならしめずんば 我を

奈何せん

私が怠け者だから、君はこれまで長年樂をしてきたので  
あって、やっぱり私のお蔭だ。もし君を樂にしてやらなか  
つたら、私はどうなったことやら。

「身」と「心」が互いに自説を主張して譲らない、掛け  
合いのスタイルを取ったのが「自戯」の趣向であろうが、  
その内容までもが「戯れ」とは言い難い。おのれの來し方  
に思いを致した上での白居易の感慨が、ここには込められ

ている。しかし、「形影神」三首が生命の有限性を正面か  
ら取りあげて、作者の切迫した感情を傳えているのに對し  
て、「自戯三絶句」は少なくとも表面上はそのような切迫  
感はない。その上、「形・影・神」でなくて「身・心」で  
ある。「身」は陶淵明の「形」に、「心」は「神」に對應す  
ると考えられるが、「影」は出てこない。

## 二 唐詩における「形影神」と「身心」

では、唐詩で「形影神」はどのように詠じられたかとい  
うと、この三つ揃いは殆ど見えない。「形影」の語あるい  
は「形」と「影」を對にした例は大變多いが、その殆どが  
燈火とその影や人と鏡に映じた影をいい、あるいは不即不  
離の例えとして用いられる「形影」であり、人やその面影  
を指す「形影」であつて、いずれも古くから見られるもの  
である。一方、「形神」といふと非常に少ないが、三十  
例近くを見ることができ、<sup>⑦</sup>しかし、いずれの場合も、陶  
淵明の「形影神」を直接的に承けたものは見當たらぬ。  
これに對して、白居易の「自戯三絶句」のように、

「身」と「心」を對にすることが唐人では斷然多い。とはいつても、次に擧げるように、大部分は佛寺や隱者あるいは老いに關わる作品における「身」と「心」である。

(一) 了然瑩心身 了然として心身かがや瑩き

潔念樂空寂 潔念 空寂を樂しむ

名香泛窗戶 名香 窓戶に泛かび

幽磬清曉夕 幽磬 曉夕に清し

(岑參「青龍招提歸一上人遠遊吳楚別詩」)

(二) 心愛名山遊 心は名山の遊びを愛し

身隨名山遠 身は名山の遠きに隨う

羅浮麻姑臺 羅浮 麻姑臺

此去或未返 此より去つて或いは未だ返らざらん

(李白「金陵江上遇蓬池隱者」)

(三) 壯心與身退 壯心 身と退き

老病隨年侵 老病 年に隨いて侵す

君子從相訪 君子 從い相訪えども

重玄其可尋 重玄 其れ尋ぬ可けんや

(王維「送韋大夫東京留守」)

ところが、中唐の頃から、官僚たる、あるいは官僚たるべき者の「身」と「心」を對比的に詠う例が散見するようになる。まずは、李端（大曆五年進士）の「題從叔沆林園」を擧げよう。

(四) 阮宅閑園暮 阮宅 閑園の暮れ

窗中見樹陰 窓中 樹陰を見る

樵歌依遠草 樵歌 遠草に依り

僧語過長林 僧語 長林を過ぐ

鳥啁花間曲 鳥は啁せんずる 花間の曲

人彈竹裏琴 人は弾く 竹裏の琴きん

自嫌身未老 自ら嫌う 身未だ老いざるに

已有住山心 已に山に住まうの心有るを

これは叔父李沆の園林を訪ねたときの作で、まだ老け込む年ではないのに（當然官にあることが前提だろう）、すでに隱居しているかのように錯覺すると、叔父の園林のすばらしさを詠っている。さらに、鮑溶（元和四年進士）の例を擧げよう。これは官途に就いては下第して歸郷するに際しての感慨を詠ったものと思われる。

(五) 如何不量力 如何ぞ 力を量らず

自取中路貧 自ら中路の貧を取れる

前者不厭耕 前者は耕を厭わず

一日不離親 一日も親を離れず

今來千里外 今來りて千里の外

我心不在身 我が心 身に在らず

(將歸舊山留別孟郊)

最後に、元稹の例を擧げる。元和五(八一〇)年、三十歳、監察御史から江陵士曹參軍に貶とされ、當地の同僚に贈った詩である。詩は、官途に就いた當時から江陵に貶とされた現在までを述べて次のように言う。官にある身と心の對比はより明瞭であろう。

(六) 昔冠諸生首 昔 諸生の首に冠たりて

初因三道微 初めて三道に因りて微せらる

公卿碧墀會 公卿 碧墀に會し

名姓白麻稱 名姓 白麻に稱せらる

……

心雖出雲鶴 心は雲を出づる鶴なりと雖も

身尙觸籠鷹 身は尙お籠に觸たる鷹なり

竦足良甘分 足を竦ませて良に分に甘んじ

排衙苦未會 衙に排びて未だ會てせざるに苦しむ

(紀懷贈李六戸曹崔二十功曹五十韻)

實は、こうした「身」と「心」を多用するのは白居易であり、その數は群を抜いている。いま、その内のいくつかを擧げて見よう。まずは、元和四(八〇九)年、三十八歳、左拾遺として長安にあつての作「寄元九」から引く。

(七) 身爲近密拘 身は近密に拘えられ

心爲名檢縛 心は名檢に縛らる

月夜與花時 月の夜と花の時と

少逢盃酒樂 盃酒の樂しみに逢うこと少なし

唯有元夫子 唯だ元夫子のみ有りて

閑來同一酌 閑に來りて同一酌す

この時、元稹は監察御史として洛陽に分司していて長安にいない。冒頭で「身爲近密拘、心爲名檢縛」と宮仕えの束縛を嘆じているものの、この詩の主調は親友元稹の不在を嘆くことにある(おそろくそれゆえに白居易はこの詩を「感

「傷」に入れたのであろう)。ただ、官にある「身」と「心」という對が早くから見えることは確認しておきたい。

(八) 從且直至昏 且從り直に昏れに至り

身心一無事 身心 一えに事無し

心足即爲富 心足らば即ち富と爲し

身閑乃當貴 身閑なれば乃ち貴に當たる

富貴在此中 富貴は此中こゝに在り

何必居高位 何ぞ必ずしも高位に居らん

〔閑居〕元和六年 四十歳 下邳 閑適

(九) 世役不我牽 世役 我を牽かず

身心常自若 身心 常に自若たり

晚出看田畝 晩に出でて田畝を看

閑行旁村落 閑行して村落そとに旁う

〔觀稼〕元和七年 四十一歳 下邳 閑適

いずれも官を退いて母の喪に服していた下邳退居時の作。

次に擧げるのは、江州左降時の作である。

(十) 身心一無繫 身心 一に繫がるる無く

浩浩如虚舟 浩浩として虚舟の如し

身と心(中原)

富貴亦有苦 富貴も亦た苦有り

苦在心危憂 苦は心の危憂するに在り

貧賤亦有樂 貧賤も亦た樂有り

樂在身自由 樂は身の自由なるに在り

〔詠意〕元和十一至十二年 四十五至四十六歳 江州 閑適

陶淵明の「形影神」を意識した「自戲三絕句」が、「身」と「心」のみを詠っていたのと同様に、ここに擧げた四例でも、陶淵明の「影」はどこかへ行ってしまったている。これは何を意味するのだろうか。

白居易においては、「身」は陶淵明の「身」と「影」とが一體になったものと思われる。しかも「影」の占める割合の方が大きかった。これを言い換えると、陶淵明においては生命の有限性への對處が大きな部分を占めていたが、白居易においては、陶淵明の「影」の言及した「生のあり方」に強く意識が注がれていたのである。陶淵明の「影」は、「身没名亦盡、念之五情熱⑩(身没して名も亦た盡き、これを念へば五情熱し)」と嘆じたが、白居易はそれを引き受け、かつ乗り越えようとしたのではないか。白居易にとっては、

士大夫としての生を自分なりに全うすること、それこそが最大の課題であつたのだと思われる。

三 心のコントロール

(一) 下邳時代から江州時代へ

白居易における「身」とは、官僚である自己の存在とイコールであつたと言えるだろう。とすれば、白居易の身と心の表現が、生命の有限性の内面的解決から遠ざかつて、官にある「身」にとつて「心」をどうコントロールするかの方に、より傾いてゆくのが必然であつたように思われる。以下、白居易の身と心に關わる表現を見てゆこう。

まずは、母の喪に服して下邳に退居していた元和六年から九年、四十歳から四十三歳の間に作られた閑適詩を挙げ

(二) 遣懷

寓心身體中 心を身體の中に寓し  
寓性方寸内 性を方寸の内に寓す  
此身是外物 此の身は是れ外物

何足苦憂愛 何ぞ苦だしく憂愛するに足らん

況有假飾者 況んや假飾する者有りて

華簪及高蓋 華簪及び高蓋なるをや

此又疏於身 此れも又た身より疏くして

復在外物外 復た外物の外に在り

操之多惴慄 これを操れば多く惴慄し

失之又悲悔 これを失えば又た悲悔す

乃知名與器 乃ち知る 名と器と

得喪俱爲害 得と喪とは 俱に害を爲すを

頽然環堵客 頽然たり 環堵の客

蘿蕙爲巾帶 蘿蕙を巾帶と爲す

自得此道來 此の道を得て自り來

身窮心甚泰 身は窮するも心は甚だ泰らかなり

これは、貧しい服喪生活ではあるものの、官から解放された境地を確かに詠じている。しかし、「此身是外物」と言い、さらには「華簪」も「高蓋」も「復在外物外」と言い、最後には「自得此道來、身窮心甚泰」と言い切るのを、果たして額面どおりに受け取ってよいものか。西村富美子



氏はかつて白居易の下邳退居時の閑適詩を論じて、次のように述べている。<sup>12)</sup>

つまり詩の表面上の表現は閑適ではあるが、この時の詩人の心情は必ずしも閑適ではなかったことを思わせるものがある。當時詩人に與えられた無限の自由は、人間の潜在的欲求ではあるが、それはあくまで日常が體制下の拘束にある時のことであり、現實に自己の生活に實現した場合、精神的緊張感からの解放はあるにしても、官僚社會に生きることとを人生の目的とする人間にどう受け止められるかは問題であろう。未來を期待した世界との斷絶感、明日という日を考えなくともよい一日、それが半永久的に續くことへの嫌厭感、と複雑に交叉する感情が、この時期の詩の背景としてあるのではないかと筆者は考えるのである。

白居易は、この下邳退居の時期、しばしば閑適を詠った。そのなかには、注⑩に列擧したように、「身」と「心」の語もしばしば使われている。たとえば、「冬夜」(元和九年、四十三歳、閑適)は村居の寂寞を詠じ、その主因を一、二

身と心(中原)

句目の「家貧親愛散、身病交遊罷(家貧しくして親愛散じ、身病んで交遊罷む)」としている。確かに官を離れたこととの關連は讀み取りにくい。<sup>13)</sup>しかし、「首夏病間」(元和六年、四十歳、閑適)は、病からひとまず開放された氣分と初夏の清々しい氣候を背景に、「忽喜身與心、泰然兩無苦(忽ち喜ぶ 身と心と、泰然として兩つながら苦無きを)」と詠っているものの、そこには「内無憂患迫、外無職役羈(内に憂患の迫る無く、外に職役の羈無し)」と官がちらりと顔を出す。<sup>14)</sup>さらに擧げれば、いかにも閑適に相應しい詩題の「閑居」(元和六年、四十歳、閑適)である。この詩はすでに(八)として一部を引いたが、その後には、

君看裴相國 君看よ 裴相國

金紫光照地 金紫 光は地を照らすも

心苦頭盡白 心苦しくして頭は盡く白く

纔年四十四 纔かに年四十四なりき

乃知高蓋車 乃ち知る 高蓋の車

乘者多憂畏 乘る者に憂畏多きを

とある。<sup>15)</sup>この詩に至っては官への拘りはより明白だろう。

白居易は下邳退居の時期にしばしば閑適を詠じたが、實は西村氏の言うように、身も心も安定した境地に到達してゐたわけではなかつた。

母の喪が明けて、白居易は元和九年の冬に太子左贊善大夫として官界に復歸した。ところが、早くも翌年、宰相武元衡暗殺事件に關する上書を越權行爲と咎められて、江州司馬へと貶とされる。この短い間の境遇の激變は、白居易の身と心にとつては大きな打撃であつたはずだ。

白居易は元和十年の冬、左降の地江州に着いた。その翌年、彼は「約心」と題する閑適詩を詠じる。時に四十五歳。

(三) 約心

黑鬢絲雪侵 黑鬢 絲雪に侵され

青袍塵土流 青袍 塵土に流る

兀兀復騰騰 兀兀復た騰騰

江城一上佐 江城の一上佐

朝就高齋上 朝には高齋の上に就き

薰然負暄卧 薰然として暄を負うて臥す

晚下小池前 晩には小池の前に下り

澹然臨水坐 澹然として水に臨んで坐す

已約終身心 已に終身の心を約せば

長如今日過 長く今日の如く過ごさん

詩題の「約心」は、「心と約束する」のではなく、「心を約する」、つまり「心をコントロールする」の意である。冒頭の四句に提示される自畫像は、決して颯爽としたイメージではない。左降以來、實體のない司馬の職にあるが

ゆえの日々の營爲と想念は、「朝就高齋上」から「澹然臨水坐」までの四句に象徴される。白居易は下邳時代以上の閉塞感を時として覺えたであろう。服喪なら當然ながら官に復する希望はある。しかし、今度は左降の身である。常に復活を樂觀視していることは難しく、悲觀と樂觀の間を彼の想念は搖れ動いたに違いない。そうした境遇に至つて、彼は心をコントロールせざるを得ないことを痛感したのである。

次に、先に注③に一部を引いた閑適詩「答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩」を見てみよう。翌元和十二年、四十六歳の作である。「崔侍郎」とは崔羣、「錢舍人」とは錢徽を指す。

二人の手紙に對して、白居易は、

旦暮兩蔬食 旦暮 兩たびの蔬食

日中一閑眠 日中 一たびの閑眠

便是了一日 便是是れ一日を了え

如此已三年 此くの如くして已に三年なり

心不擇時適 心は時の適なるを擇はず

足不揀地安 足は地の安きを揀はず

窮通與遠近 窮通と遠近と

一貫無兩端 一貫して兩端無し

と左降三年目の生活から詠い始める。その後「世間の人  
はそうではなく、諸事に引かれて身心を疲れさせしまうの  
だ」という趣旨の注③所引の部分が續いている。その後を  
引こう。

吾有二道友 吾に二道友有り

藹藹崔與錢 藹藹たる崔と錢と

同飛青雲路 共に青雲の路を飛びしが

獨墮黃泥泉 獨り黃泥の泉に墮つ

二人の友人と自身の境遇は雲泥の差となったが、

身と心(中原)

歲暮物萬變 歲暮 物は萬變すれど

故情何不遷 故情 何ぞ遷らざる

應爲平生心 應に平生の心の

與我同一源 我と同一の源なる爲ならん

帝鄉遠於日 帝鄉 日より遠く

美人高在天 美人 高く天に在り

誰謂萬里別 誰か謂わん 萬里に別るるも

常若在目前 常に目前に在るが若し

變わらぬ友情でこちらを思いやってくれる。

泥泉樂者魚 泥泉に樂しむ者は魚

雲路遊者鸞 雲路に遊ぶ者は鸞

勿言雲泥異 言う勿かれ雲と泥との異なるを

同在逍遙間 同じく逍遙の間に在り

私は泥泉に樂しむ魚、お二人は雲路を行く鸞という違

はあるけれど、心の持ちようでは同じこと。

因君問心地 君の心地を問うに因つて

書後偶成篇 書の後偶たま篇を成せり

慎勿説向人 慎んで人に説向く勿かれ

人多笑此言 人多く此の言を笑わん

行き來した手紙の内容はもちろん知る由もないが、白居易はおそらく「吏隱」に通ずる主張を二人に訴えたであらう。

同じ年の春、廬山の草堂が成り、白居易は「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」を詠じ、さらに「重題」三首を詠じた。第三首はよく知られるが、そのなかにも「身」と「心」が見える。

日高睡足猶慵起 日高く睡り足りて 猶お起くるに慵  
 小閣重衾 寒さを怕れず  
 遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聽き  
 香爐峯雪撥簾看 香爐峯の雪は簾を撥ねて看る  
 匡廬便是逃名地 匡廬は便ち是れ名を逃るる地  
 司馬仍爲送老官 司馬は仍お老いを送る官爲り  
 心泰身寧是歸處 心泰らかに身寧らかなるこそ是れ歸る處  
 故鄉可獨在長安 故郷 獨り長安に在る可けんや

江州における身と心を詠う一連の閑適詩を見れば、この詩は雜律詩とはいえども、頸聯と尾聯は額面通りに確固たる閑適の境地を詠うとは受け取れない。<sup>17)</sup>そして、江州足掛け四年目の元和十三年、四十七歳になった白居易は、雜律詩「遣懷」を詠じて、今度は「身と心」と約束する。

(三) 遣懷

義和走馭趁年光 義和 馭くるまを走らせて 年光を趁おい  
 不許人間日月長 人間に日月の長きを許さず  
 遂使四時都似電 遂に四時をして都て電いなずまに似しめ  
 爭教兩鬢不成霜 争で兩鬢をして霜を成さざらしめん  
 や  
 榮銷枯去無非命 榮え銷くえて枯れ去るは 命に非ざる  
 無く  
 壯盡衰來亦是常 壯盡きて衰え來るも 亦た是れ常なり  
 已共身心要約定 已に身心と共に約定するを要せり  
 窮通生死不驚忙 窮通 生死 驚あわき忙わてずと  
 首聯から頸聯までは生命の有限性について詠じており、

末句に「生死」の語のあるのは當然なのであるが、そこに「窮通」が混じっている。江州左降時の白居易の想念には常に官がまとわりついている。そして、「すでに身と心には約束するように言つてある」という第七句は、彼の心のコントロールの到達点であつた<sup>⑮</sup>。江州左降は白居易の考え方・生き方、さらにはその詩作にとつて大きな轉換点であつた<sup>⑯</sup>。

(二) 忠州以後

元和十四年二月、白居易は「別草堂三絶句」を詠つて草堂に別れを告げ、忠州刺史へと移る。元和十五年、四十九歳、忠州での感傷詩に「我身」がある。

我身

我身何所似 我が身は何の似る所ぞ  
似彼孤生蓬 彼の孤生の蓬に似たり  
秋霜翦根斷 秋霜 根を翦りて斷ち  
浩浩隨長風 浩浩として長風に隨う  
昔游秦雍間 昔 秦雍の間に遊び

身と心(中原)

今落巴蠻中 今 巴蠻の中に落つ  
昔爲意氣郎 昔 意氣の郎と爲り  
今作寂寥翁 今 寂寥の翁と作る  
外貌雖寂寞 外貌 寂寞たりと雖も  
中懷頗沖融 中懷 頗る沖融たり  
賦命有厚薄 命を賦さるるは厚薄有れば  
委心任窮通 心を委ねて窮通に任す  
通當爲大鵬 通ずれば當に大鵬と爲つて  
舉翅摩蒼穹 翅を舉げて蒼穹を摩すべし  
窮則爲鷓鴣 窮すれば則ち鷓鴣と爲つて  
一枝足自容 一枝 自らを容るるに足る  
苟知此道者 苟も此の道を知る者は  
身窮心不窮 身窮しても心は窮せず  
「外貌雖寂寞、中懷頗沖融」であるのは、「賦命有厚薄、委心任窮通」だからだと言うのだが、「孤生蓬」のごときその身に中央復歸の可能性が生じたからこそであるう。そして、翌元和十五年、白居易は期待通りに中央に復歸し、司門員外郎となる。

その二年後、長慶二年、五十一歳のときに白居易は杭州刺史に出る。杭州での閑適詩「詠懷」は、まず中央官の苦勞と對比して、地方官の氣樂さを詠い、<sup>21</sup>次いで、やはり心の有りようの重要性を指摘して終わる。白居易は江州時代以後も「身」と「心」を詠うことをやめなかつたのである。<sup>22</sup>

人生百年内 人生 百年の内

疾速如過隙 疾速はやきこと隙を過ぐるが如し

先務身安閑 先ず身の安閑なるに務め

次要心歡適 次いで心の歡適なるを要す

事有得而失 事には得て失う有り

物有損而益 物には損じて益す有り

所以見道人 所以に見道の人は

觀心不觀跡 心を觀て跡を觀ず

最後に、太和八年、六十三歳、太子賓客として洛陽に分子司していた時の作「風雪中作」を見よう。「身」と「心」の語を驅使して晩年の心境を詠じている。ここに至ると、「身」と「心」の葛藤は、表面上はかなり薄れていると言

えそうだが、決して消滅したわけではない。

(四) 風雪中作

歲暮風動地 歲暮 風は地を動かし

夜寒雪連天 夜寒くして 雪は天に連なれり

老夫何處宿 老夫は何處にか宿る

暖帳溫爐前 暖帳 溫爐の前

兩重褐綺衾 兩重の褐綺の衾

一領花茸氈 一領の花茸じょうの氈

吹雪の夜もぬくぬくとして眠る。

粥熟呼不起 粥熟して 呼びて起きず

日高安穩眠 日高くして 安穩として眠る

是時心與身 是の時 心と身と

了無閑事牽 了として閑事の牽く無し

日がな一日、身も心ものんびり。

以此度風雪 此を以て風雪を度りわた

閑居來六年 閑居してこのかた來 六年なり

忽思遠遊客 忽ち思ふ 遠遊の客

復想早朝士 復た想う 早朝の士

踏凍侵夜行 凍こおりを踏んで 夜を侵して行き

凌寒未明起 寒さを凌いで 未明に起く

しかし、ふと往時の宦遊や夜明け前からの出勤を思い出して、自らに言い聞かす。官に在れば身は情況に甘んじざるを得ないのでから、心が足るを知らねばならない、心をコントロールせねばならないと。末二句は、語を「方寸」と「形骸」に替えて、その意を詠う。

心爲身君父 心は身の君父爲り

身爲心臣子 身は心の臣子爲り

不得身自由 身の自由なるを得ずんば

皆爲心所使 皆 心の使う所と爲る

我心既知足 我が心 既に足るを知れば

我身自安止 我が身も自ら止まるに安んず

方寸語形骸 方寸かたうた 形骸かたがたに語る

吾應不負爾 吾 應なんじに爾そむに負かざるべしと

老いという一種の停滞（安定）に向かう過程においても、官爲るべき自らの在り方についての白居易の内面の葛藤は、薄れこそすれ、消え去ることはなかったであろう。江州左

身と心（中原）

降當時、白居易は自らがその後三十年も存えることになるとは思わなかったであろうが、洛陽分司以後、その最晩年に至るまで、しきりに身と心を詠じて、閑適あるいは吏隱<sup>23</sup>の喜びをそこに込めたのは、彼にとつては「あきらめる覺悟」の確認作業でもあったであろう。單なる吏隱の謳歌と捉えることはできない。

唐代には、長い分裂と不安定な時代が終わり、新しい社會秩序が確立された。特に寒門出身者が政治の中樞に關わることが多くなる中唐以後、士大夫たちにおいては、生命の有限性という問題は後景に退いて、心底にひそかに沈殿し、折に觸れて浮かび上がる體のものとなり、これに代わつて最大の問題として彼らの面前にあったのは、現實の社會において士大夫として責任を負うべき自分はどうすべきか、つまり官僚としての自らの身の處し方であつたと思われる。陶淵明の「形影神」で言えば、「神」の調停が結局有効ではないことを認め、「影」の言うところに従うことに、自らの責務と存在意義とを措定したのである。元和十三年、四十七歳、江州での閑適詩「詠懷」の、特にその末

八句は、そうした意識の表れとして讀めるだろう。<sup>24)</sup>

窮通不由己 窮通は己れに由らず

歡戚不由天 歡戚は天に由らず

命即無奈何 命は即ち奈何する無くも

心可使泰然 心は泰然たらしむ可し

且務由己者 且く己れに由る者に務めん

省躬諒非難 躬らを省みるは諒に難きに非ず

勿問由天者 天に由る者を問う勿かれ

天高難與言 天は高くして與に言い難し

おわりに

以上、白居易の身と心をめぐって私見を述べてきたが、中唐の士大夫たちは概して官としての出處進退という意識を共有していたと思われる。つまり、生命の有限性は自明のものとして受け入れざるを得ないことを認めた上で、官爲るべき自らの在り方を考えたのである。たとえば、吉川幸次郎氏が韓愈について次のように言うのも、小稿の言うところと重なる。

人間の受ける諸種の限定、死はその最も大きなものであるが、それらに對する悲しみを、もはやあえて悲しみとしなかつたのである。或いは悲しみとしつつも、それらは従來の詩人が歌うにまかせたのである。人間の受ける限定、もしくは萬物の受ける限定、それは彼にとつては確定したものであり、もはや彼自身の悲哀の對象とはならなかつたのである。

注⑬に掲げた拙稿で取り上げた韓愈「復志賦」の「昔余之約吾心兮、誰無施而有獲（昔 余の吾が心を約して、誰か施す無くして獲る有らん）」、孟郊「靖安寄居」に見える「外物莫相誘、約心誓從初（外物相誘う莫かれ、心を約して誓つて初めに従わん）」も、その意識の根底にあるものは白居易と同様であろう。

また、川合康三氏が、生命の有限性を嘆ずる晉の羊祜の「峴山」の故事や春秋齊の景公の「牛山」の故事を取り上げ、六朝期にはそうした情感が色濃く漂っていることを指摘した上で、

唐代に入ると、……羊祜やそれに續く六朝の悲傷に色



濃い自分の命のはかなさを嘆く心情は薄らいでいる。

……唐代でも杜甫や中唐の文學者になると羊祜の故事を取り上げることにもまれになり、人生短促は彼らの關心を引く文學的テーマではなくなっていく。宋代に入つて、……卓越した治世者としての羊祜を讃えることが中心になり、羊祜が抱いた人生の悲しみは遠のいていく。

と云うのは、<sup>26</sup>中唐、さらには宋代の士大夫について考えるに際して示唆的である。白居易は、その典型であった。あるいは、中唐の士大夫のなかでは、白居易が最も自覺的だったと言えるかも知れない。

では宋代の士大夫たちはどうかといえ、蘇軾をはじめとして、その多くが小稿で論じた白居易の精神の在り方を繼承しているように思える。しかし、いま筆者はそれを考察し、論じるに足る能力と材料を持たない。<sup>27</sup>ただ、次のようには言えそうである。白居易も陶淵明も農を基盤とする知識人であったと同時に、寒門ゆえに仕官せざるを得なかった。それを断ち切つて農として生きた陶淵明に對して、

身と心(中原)

白居易は羨望と憧憬の入り混じつた忸怩たる思いを抱いていたのであり、<sup>28</sup>そうした二人の人生の在りように、宋代の士大夫たちが意識的にであれ、無意識的にであれ、共鳴したであろうことは容易に想像される。

たしかに、白居易は晩年に至るまで、しばしば吏隱や閑適のよろこびを詠じた。しかし、それは彼がすっかり納まり返つていたからではない。魯迅がその講演「魏晉風度及文章與藥及酒之關係」<sup>29</sup>を締めくくるに當つて、陶淵明について語つたことは、

據我的意思，即使是從前的人，那詩文完全超于政治的所謂『田園詩人』，『山林詩人』，是沒有的。完全超出于人間世的，也是沒有的。既然是超出于世，則當然連詩文也沒有。詩文也是人事，既有詩，就可以知道于世事未能忘情。譬如墨子兼愛，楊子爲我。墨子當然要著書：楊子就一定不著，這纔是『爲我』。因爲若做出書來給別人看，便變成『爲人』了。

に我々は思いを致すべきではなかるうか。それは、なにも陶淵明に限らないはずである。

註

① 入矢義高「生と死——水と氷の喩えをめぐる——」（岩波現代文庫『増補 求道と悦樂——中國の禪と詩』、二〇一二、初出は『佛教史學研究』23卷第1號、一九八二）は、中國における生命の有限性に關連する言説を、水と氷の喩えを中心に掲げて概観して示唆に富む。小稿で取り上げる陶淵明についても言及されている。

② 引用は清、陶澍集注『靖節先生集』に據った。

③ このことは、江州左降時の作「答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩（崔侍郎、錢舍人の書問に答え、因りて繼ぐに詩を以てす）」（元和十二年、四十六歲、閑適）の中に、

常見今之人 常に見る 今の人

其心或不然 其の心 或は然らず

在勞則念息 勞に在れば則ち息を念い

處靜已思暄 靜に處れば已に暄を思ふ

如是用身心 是くの如く身と心とを用うれば

無乃自傷殘 乃ち自らを傷殘する無からんや

坐輪憂惱便 坐して憂惱に便を輪し

安得形神全 安んぞ形と神との全きを得んや

とあることから確認される。

④ 陶淵明の「形影神」は、慧遠の「形盡神不滅論」や「佛影銘」を意識して作られたとされるが、この三つを對比した作品は、松浦友久『陶淵明・白居易論——抒情と説理』二三七

頁（松浦友久著作選Ⅱ、研文出版、二〇〇四）に言うように、元來他に餘り見られないようで、特に唐詩に特徴的であるというわけではない。

ただし、「神」ではなく、「心」なら三者が登場する例はわずかだがある。

獨乘雞棲車、自覺少風調。心曲語形影、祇身焉足樂。

（李賀「春歸昌谷」）

形影暗相問、心默對以言。

（白居易「夜雨有念」）

却恐吾形影、嫌心與口違。

（齊己「驚秋」）

⑤ 例を舉げておく。

誰言形影親、燈滅影去身。

（孟浩然「贈李觀」）

無因同波流、願作形與影。

（張籍「懷別」）

晨興照清鏡、形影兩寂寞。

（白居易「歎老三首」其一）

⑥ 例を舉げておく。

況我兄弟遠、一身形影單。

（元稹「和樂天別弟後月夜作」）

形影一朝別、煙波千里分。

（王涯「閩人贈遠五首」其三）

⑦ いくつか例を擧げておく。

盜賊縱横甚密邇、形神寂寞甘辛苦。

(杜甫「寄柏學士林居」)

既安生與死、不苦形與神。所以多壽考、往往見玄孫。

(白居易「朱陳村」)

蕭條風煙外、爽朗形神寂。

(李渤「南溪詩」)

⑧ 早い例としては、陳子昂「喜遇冀侍御珪崔司議泰之二使」の序に、「餘獨坐一隅、孤憤五蠹、雖身在江海、而心馳魏闕」とある。しかし、この「身」と「心」は宦遊に在る者が都を思いやるという習見の表現であり、官僚としての生き方に關わるものではない。

⑨ この詩は呂溫(七七二〜八一)の作としても見え、詩題を「題從叔園林」とする。呂溫にも沆という從叔がいたが、岑仲勉「讀全唐詩札記」(「唐人行第錄」所收)が李端と交遊のあった盧綸に「題李沆園」があるのによつて李端の作とするのに從う。

⑩ 白居易の「身」と「心」の表現が見えるのは、實に六十七首に及ぶ。いま、その詩題と制作年を煩を厭わず列擧しておく。

左拾遺・京兆府戶曹參軍まで

永崇里觀居(永貞元年、三十四歲、校書郎、長安 閑

適)

身と心(中原)

贈別宣上人(元和三年至五年、長安、翰林學士 雜律

詩)

寄元九(元和四年、三十八歲、左拾遺、長安 感傷)

醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季

(元和四年、三十八歲、左拾遺、長安 感傷)

新樂府 杏爲梁(元和四年、三十八歲、左拾遺、長安

諷諭)

和答詩十首 和思歸樂(元和五年、三十九歲、左拾遺、

長安 諷諭)

和答詩十首 和古社(元和五年、三十九歲、左拾遺、長

安 諷諭)

秋山(元和五年至六年 閑適)

隱几(元和五年、三十九歲、下邳(五年末長安での作

か?) 閑適)

續古詩十首其八(元和六年至九年、長安(下邳) 諷諭)

下邳退居

閑居(元和六年、四十歲、下邳 閑適)

首夏病間(元和六年、四十歲、下邳 閑適)

白髮(元和六年、四十歲、下邳 感傷)

自覺二首其一(元和六年、四十歲、下邳 感傷)

遣懷(寓心身體中)(元和六至九年、四十至四十三歲、

下邳 閑適)

觀稼(元和七年、四十一歲、下邳 閑適)

效陶潛體詩十六首其五（元和八年、四十二歲、下邳 閑

適）

冬夜（元和九年、四十三歲、下邳 閑適）

遊悟真寺詩一百三十韻（元和九年、四十三歲、籃田（下

邳） 閑適）

答友問（元和九年、四十三歲、下邳 雜律詩）

太子左贊善大夫

苦熱題恆寂師禪室（元和十年、四十四歲、長安 雜律

詩）

江州司馬

約心（元和十一年、四十五歲 閑適）

詠意（元和十一至十二年、四十五至四十六歲 閑適）

答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩（元和十二年、四十六歲

閑適）

首夏（元和十二年、四十六歲 感傷）

重題其三（元和十二年、四十六歲 雜律詩）

贈韋鍊師（元和十二年、四十六歲 雜律詩）

對酒示行簡（元和十三年、四十七歲 閑適）

詠懷（元和十三年、四十七歲 閑適）

遣懷（元和十三年、四十七歲 雜律詩）

答元八郎中楊十二博士（元和十三年、四十七歲 雜律

詩）

別草堂三絕句其一（元和十四年、四十八歲 雜律詩）

忠州刺史

郡齋暇日憶廬山草堂兼寄二林僧社三十韻多敘貶官已來出

處之意（元和十四年、四十八歲 雜律詩）

我身（元和十五年、四十九歲 感傷）

杭州刺史

過駱山人野居小池（長慶二年、五十一歲、自長安至杭州

路上作 閑適）

詠懷（長慶二年、五十一歲 閑適）

北院（長慶四年、五十三歲 格詩）

蘇州刺史

百日假滿（寶曆二年、五十五歲 律詩）

祕書監·刑部侍郎

閑出（大和二年、五十七歲、刑部侍郎、長安 律詩）

齋月靜居（大和二年、五十七歲、刑部侍郎、長安 律

詩）

太子賓客分司

授太子賓客歸洛（大和三年、五十八歲 格詩）

秋池二首其一（大和三年、五十八歲 格詩）

問秋光（大和三年、五十八歲 格詩）

秋遊平泉贈韋處士閑禪師（大和四年、五十九歲 格詩）

勉閑遊（大和四年、五十九歲 律詩）

河南尹

吾土（大和五年、六十歲 律詩）

聽幽蘭（大和六年、六十一歲 律詩）

太子賓客・少傅分司

詠興五首其二 出府歸吾廬（大和七年、六十二歲、罷河

南尹再任太子賓客 格詩）

詠興五首其三 池上有小舟（大和七年、六十二歲、罷河

南尹再任太子賓客 格詩）

睡覺偶吟（大和七年、六十二歲、太子賓客 律詩）

池上閑吟二首其二（大和八年、六十三歲、太子賓客 律

詩）

早服雲母散（大和八年、六十三歲、太子賓客 律詩）

奉酬侍中夏中雨後遊城南莊見示八韻（大和八年、六十三

歲、太子賓客 律詩）

風雪中作（大和八年、六十三歲、太子賓客 格詩）

途中作（大和九年、六十四歲、太子賓客、自長安歸洛陽

途上作 格詩）

早熱二首其一（大和九年、六十四歲、太子賓客 格詩）

卽事重題（大和九年、六十四歲、太子少傅 律詩）

詠懷（大和九年、六十四歲、太子少傅 律詩）

三適贈道友（開成二年、六十六歲、太子少傅 格詩）

狂言示諸姪（開成二年、六十六歲、太子少傅 格詩）

病中詩十五首 病中五絕其四（開成四年、六十八歲、太

子少傅 律詩）

自戲三絕句（開成五年、六十九歲、太子少傅 律詩）

身と心（中原）

致仕（在洛陽）

開龍門八節石灘詩二首其二（會昌四年、七十三歲 律

詩）

偶作寄期之（會昌二年至會昌四年、七十一歲至七十三歲、

律詩）

自問此心呈諸老伴（會昌六年、七十五歲 律詩）

⑪ もちろん白居易も、

古來如此非獨我 古來 此くの如きは 獨り我のみに非

ず

未死有酒且高歌 未だ死せずして酒有れば 且く高歌せ

ん

〔浩歌行〕元和十三年 四十七歲 江州 感傷）

把酒仰問天 酒を把りて仰ぎて天に問う

古今誰不死 古今 誰か死せざる

所貴未死間 貴ぶ所は 未だ死せざる間

少憂多歡喜 憂い少なく歡喜多きこと

〔把酒〕大和七年（八三三） 六十二歲 洛陽）

のように、淵明の「形」が詠嘆したのと同様に、生命の有

限性に言及することはあるし、

我無奈命何 我は命を奈何ともする無ければ

委順以待終 委順して以て終わるを待たん

命無奈我何 命は我を奈何ともする無ければ

方寸如虛空 方寸 虛空の如し

〔達理二首〕其一 元和十三年 四十七歲 江州 閑  
適)  
のように、「神」と同様の方向で精神の均衡を保とうとする  
ことはある。

⑫ 「白居易の閑適詩について——下邳退居時——」(古田教  
授退官記念 中國文學語學論集、一九八五、東方書店)

⑬ 家貧親愛散、身病交遊罷。眼前無一人、獨掩村齋卧。冷落  
燈火暗、離披簾幕破。策策窗戶前、又聞新雪下。長年漸省睡、  
夜半起端坐。不學坐忘心、寂寞安可過。兀然身寄世、浩然心  
委化。如此來四年、一千三百夜。

⑭ 我生來幾時、萬有四千日。自省於其間、非憂卽有疾。老去  
慮漸息、年來病初愈。忽喜身與心、泰然兩無苦。況茲孟夏月、  
清和好時節。微風吹袂衣、不寒復不熱。移榻樹陰下、竟日何  
所爲。或飲一甌茗、或吟兩句詩。內無憂患迫、外無職役羈。  
此日不自適、何時是適時。

⑮ 「裴相國」とは裴垍のこと。元和三年に宰相となり、六年  
に卒している。以下に詩の全文を引いておく。

空復一盞粥、飢食有餘味。南簷半牀日、暖卧因成睡。綿  
袍擁兩膝、竹几支雙臂。從旦直至昏、身心一無事。心足  
卽爲富、身閑乃當貴。富貴在此中、何必居高位。君看裴  
相國、金紫光照地。心苦頭盡白、纔年四十四。乃知高蓋  
車、乘者多憂畏。

⑯ 「約+心」と「介詞+心+約」の語義の違いについては、

拙稿「約心」ということ」(『中國言語文化研究』第六號、  
二〇〇六、のちに『宋詞と言葉』(汲古書院、二〇〇九)所  
收)で論じた。ここでは、「介詞+目的語+約」の例を補っ  
ておく。

已共崔君約、樽前卽倒休。

(白居易、工六年冬暮贈崔常侍晦叔)

誚盧勸與、予數約遊三寺、勸獨沈醉而不行。

(元稹詩題)

如今暗與心相約、不動征旗動酒旗。

(高駢「寫懷二首」其二)

⑰ 同じ年の作「首夏」(感傷)にも「不如放身心、冥然任天  
造」と言いながら、「何必歸故鄉、茲焉可終老」と官に後ろ  
髪を引かれている。

⑱ 「已共身心要約定」の句は、李德裕「賜李石詔意」(會昌  
一品集)卷七)に「卿與、其要約、令面縛來降、卿即馳至界首、  
親自受納、苟不如此、且須進軍、必不得因此遷延」とあるの  
を参考にして、「已に身心と共に要約定まれり」とも讀めそ  
うである。「要約」は「盟約」の意で用いられることが多く、  
白居易の散文にも見える。とすれば、この句はさらに斷定の  
調子を帯びることになる。

⑲ 白居易の四分類は江州時代に元稹に充てた「與元九書」  
(元和十年)で表明された。その内の諷諭と閑適は、いずれ  
も白居易の士大夫としての内省を経た作品群であり、諷諭の

ベクトルは外に向かう。したがって、政治・社會批判ではなく、一見元稹との友情を詠うと見えるような詩も含まれるであろう。一方閑適のそれは内に向かう。兩者の違いはそこに在るだけだと考えられる。白居易にとつて獨善は常に存すべきものであり、兼濟は獨善を前提として成り立つものであった。兩者は不可分なのである。

自らの詩に「諷諭」という範疇を措定すること、それは江州時代の白居易にとつて、それまでの營爲に對する矜持の表れであり、兼濟を標榜する士大夫として當然のことであつたらう。しかし一方で、以後、自らの詠ずる詩が「閑適」に向かわざるを得ないことも、左降間もない白居易には特に強く自覺されたと思われる。言い換えれば、爾後自ら甘んじて吏隱という立場に立つことを覺悟し、それを決然と表明したのである。それは、服喪↓官界復歸↓左降という境遇の急展開によつて齎された、精神の昂揚状態の中での思索の結果であつたが、小稿の冒頭に言う「あきらめる覺悟」に裏付けられたものでもあつたはずである。

⑳ 三首の原文を引いておく。其の二でも「身」と「心」を使っている。

正聽山鳥向陽眠、黃紙除書落枕前。爲感君恩須暫起、鐘峯不擬住多年。

久眠褐被爲居士、忽掛緋袍作使君。身出草堂心不出、廬山未要動移文。

身と心（中原）

三間茅舍向山開、一帶山泉遶舍迴。山色泉聲莫惆悵、三年官滿却歸來。

⑳ 昔爲鳳閣郎、今爲二千石、自覺不如今、人言不如昔、昔雖居近密、終日多憂傷、有詩不敢吟、有酒不敢喫、今雖在疏遠、竟歲無牽役、飽食坐終朝、長歌醉通夕（昔、鳳閣の郎と爲り、今、二千石と爲る。自らは覺ゆ、今に如かずと、人は言う昔に如かずと。昔、近密に居ると雖も、終日、憂傷多し。詩有るも敢えて吟ぜず、酒有るも敢えて喫らわず。今、疏遠に在ると雖も、竟歲、牽役無し。飽食して坐すこと終朝、長歌して酔うこと通夕たり）

㉑ 注⑩參照。

㉒ 白居易は太子賓客として洛陽に分司したとき、「中隱」と題する詩を作り、

大隱住朝市、小隱入丘樊。丘樊太冷落、朝市太囂諠。不如作中隱、隱在留司官。

㉓ と詠っている。この「中隱」は吏隱と言ひ換えてよいだろう。全文を引いておく。

再求與顏淵、卞和與馬遷。或罹天六極、或被人刑殘。顧我信爲幸、百散且完全。五十不爲天、吾今缺數年。知分心自足、委順身常安。故雖弱退日、而無戚戚顏。昔有榮先生、從事於其間。今我不量力、舉心欲攀援。窮通不由己、歡戚不由天。命即無奈何、心可使泰然。且務由己者、省躬諒非難。勿問由天者、天高難與言。

なお、同じ年の七月、白居易は「江州司馬廳記」を書き、そのなかで次のように言う。

若有人畜器貯用、急於兼濟者居之、雖一日不樂、若有人養志忘名、安於獨善者處之、雖終身無悶、官不官繫乎時也、適不適在乎人也

(若し人の器を畜え用を貯めて、兼濟に急なる者ここに居る有れば、一日と雖も樂しまざらん。若し人の志を養い名を忘れて、獨善に安んずる者ここに處る有れば、終身と雖も悶え無からん。官たると官たたらざるとは時に繫かる。適なると適ならざるとは人に在り)

この「官不官繫乎時也、適不適在乎人也」も同様に解せるだろう。

②5 清水茂『韓愈』(中國詩人選集第十一卷、岩波書店、一九五八)への跋。

②6 「優美なる悲傷——六朝文學の特質」(『漢文教室』第一八七號、大修館書店、二〇〇一年五月)、引用は『中國古典文學彷徨』(研文出版、二〇〇八)に據る。

②7 いま管見に入っているのは、南宋、周密『齊東野語』卷九「形影身心詩」が、陶淵明の「形影神」三首とこれを踏まえた蘇軾の「問淵明」詩、さらに白居易の「自戲三絕句」と蘇軾の「劉景文家藏樂天身心問答三首戲書一絕其後」詩について論じていること、また南宋の李綱に「次韻和淵明形影神三首」、同じく吳芾に「和陶形影影」と「和陶神釋」があるこ

とくらいである。ただし、宋人が陶淵明の「形影神」を直接踏まえた作品は、あまり見当たらないようである。

②8 中唐士大夫と農の關係については、渡邊信一郎『中國古代社會論』第六章「唐宋變革期における農業構造の發展と下級官人層——白居易の慙愧」(青木書店、一九八六)を参照。

なお、こうした思いは白居易に限らなかつたと思われる。たとえば、韓愈「送李愿歸盤谷序」には、盤谷に隱棲する李愿のことばを記して、「人之稱大丈夫者、我知之矣、……吾非惡此而逃之、是有命焉、不可幸而致也、窮居而野處、升高而望遠、坐茂樹以終日、濯清泉以自潔、採於山、美可茹、釣於水、鮮可食、起居無時、惟適之安、與其有樂於身、孰若無憂於其心、(人の大丈夫と稱せらるる者は、我これを知れり。……吾は此れを惡んで逃るるに非ず、是れ命有れば、幸いにして致す可からざるなり。窮居して野に處り、高きに升って遠きを望み、茂樹に坐して以て日を終え、清泉に濯いて以て自らを潔うす。山に採れば、美を茹らう可く、水に釣すれば、鮮を食う可く、起居に時無く、惟だ適にこれ安んず。その身に樂しみ有らんよりは、その心に憂い無きに孰若ぞ)」とある。韓愈は「聞其言而壯之」と言うが、李愿のように隱棲したわけではない。とはいえ、韓愈の内心には多少なりとも李愿に對して忤怩たるものがあつたはずである。

②9 『而已集』所收。引用は「魯迅全集」(魯迅全集出版社、一九四六年一月(一九三八年六月初版)第三卷に據つた。



附記

小稿は、二〇一六年七月二十三日、京都大學中國文學會第三十一回例會での口頭發表「身と心——白居易の「自戲三絶句」をめぐって考えたこと」をもとにまとめたものである。

当日は数々の有益な質問と意見とを出席の方々から頂戴した。まず、ここに記して謝意を表したい。

注⑩に掲げた拙論「約心ということ」を書いたのはちょうど十年前で、小稿で取り上げたテーマをまとめるための準備の一環として、「約心」の語義をつかむことを目的としたものだった。しかし、その後、諸事情ゆえに考えをまとめる機会を失っていた。いま、曲がりなりにも所期の目的を達することができたのは、例會擔當の楊維公さんをはじめとする京都大學の大学院生諸氏の慫慂があつてこそである。これも記して謝意を表したい。